

建造物の概要

通番	名称	種別	建築年代	建築面積	構造及び形式	員数
1	しんりゅうじほんどう 真龍寺本堂	建築物・ 宗教	明治14年頃／大正9年・令和2年改修	263㎡	木造平屋建、瓦葺	1棟
2	しんりゅうじげんかん 真龍寺玄関及び茶室	建築物・ 宗教	大正後期	31㎡	木造平屋建、瓦葺	1棟
3	しんりゅうじしょうろう 真龍寺鐘楼	工作物・ 宗教	明治31年	6.4㎡	木造、瓦葺	1棟
4	しんりゅうじさんもん 真龍寺山門	工作物・ 宗教	昭和23年	2.8㎡ (間口)	木造、瓦葺	1棟
所在地		岐阜市長良2509-1				
登録基準		本堂、玄関及び茶室：(2) 造形の規範となっているもの 鐘楼、山門：(1) 国土の歴史的景観に寄与しているもの				

真龍寺について

- ・市の中心を西流する長良川の北岸、市最高峰の百々ヶ峰を背に立地する浄土真宗寺院。
- ・本堂は、真宗本堂の典型的な平面方式。長大な虹梁や金箔押し彫刻欄間等が見どころ。
- ・玄関及び茶室は、寺院の機能的な玄関と接客空間で、円窓等細部に施された意匠が見どころ。
- ・鐘楼は、装飾を抑えた端正な造り。背景の山並みと合わせて地域の歴史的景観に寄与。
- ・山門は、境内南正面に開き、墓股等彫刻による豊かな装飾性を持つ。鐘楼と並んで地域の歴史的景観に寄与。
- ・本堂、鐘楼、山門の建築は、それぞれ笠原治助、治七、村瀬省吾の手によるもので、地元の同じ一門の大工が携わっていたことが分かっている。

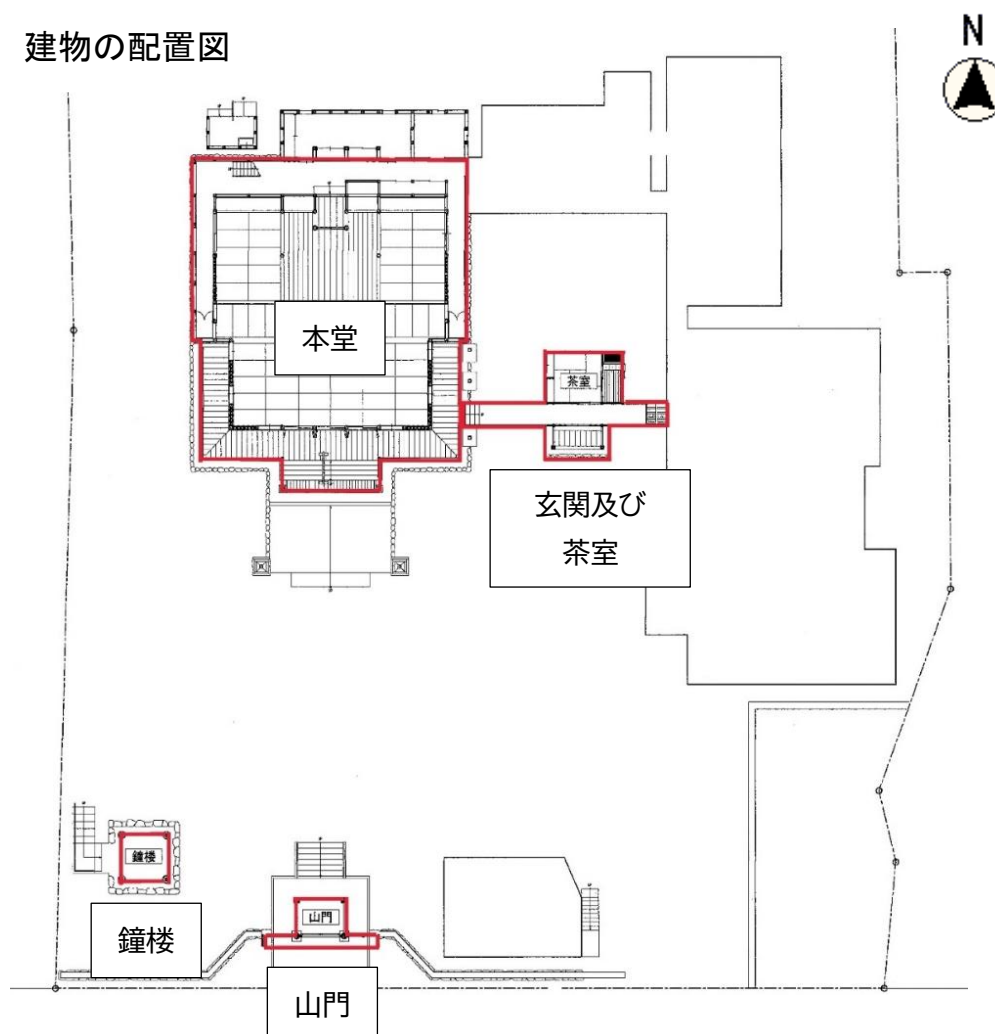
真龍寺関連年表

年 代	内 容
明応8年(1499)	蓮如上人門弟の門慶が創建したとされる
江戸時代初期	現在の地(長良)に移転し、その後定まったとされる
慶長11年(1606)	加納藩主奥平信昌と対立した西巖寺住職である浅野教西が追放され、尾張藩領飛び地の領地にあった真龍寺に避難し住職として迎えられる
寛永11年(1634)	加納藩主奥平忠隆のとりなしにより西巖寺再興を認められ、真龍寺住職の兄弟が西巖寺に入寺
明治14年(1881)	本堂建築(棟梁：笠原治助)
明治31年(1898)	鐘楼建築(棟梁：笠原治七)
大正9年(1920)	本堂内の彫刻欄間に金箔を施す
大正時代後期	茶室及び玄関建築
昭和23年(1948)	山門再建(棟梁：村瀬省吾) ※大正10年の台風で倒壊
令和2年(2020)	本堂耐震改修

位置図



建物の配置図



1 真龍寺本堂 特徴

どどがみね 百々ヶ峰を背に境内を構える浄土真宗寺院の本堂。いりもやづくりさんかわらぶき 入母屋造 瓦葺、こうはい 向拝を構え正面七間で規模大きく、平面はないげじん やらいうち 内陣左右に余間を配す等、真宗本堂の典型。長大なこうりょう 虹梁で柱を省略して外陣を大空間とし、こぐみごうてんじょう 小組格天井、ちょうこくらんま 金箔押し彫刻欄間で荘厳する。

※建築年代ははりぼくしよ 梁墨書による。棟梁は笠原治助。大正9年（1920）に彫刻欄間に金箔を施す。令和2年に全面修理と耐震補強。

用語解説

・入母屋造（いりもやづくり）

屋根の形式の一つで、上の方が切妻、下が四方へ勾配をもつ屋根面をもつもの。

・向拝（こうはい）

参拝のため、神社や寺院の正面で、屋根を前に張り出した場所。

・外陣（げじん）

神社・仏寺の内陣の外側で、一般の人々が礼拝する所。

・矢来内（やらいうち）

参拝の場である外陣と内陣を分ける段差や柵。

・内陣（ないじん）

神社の本殿や仏寺の本堂の奥にあって、神体または本尊を安置しておく所。

・余間（よま）

内陣に隣接する左右の二つの部屋のこと。

・虹梁（こうりょう）

梁の一種で、虹のようにそりがある梁のこと。

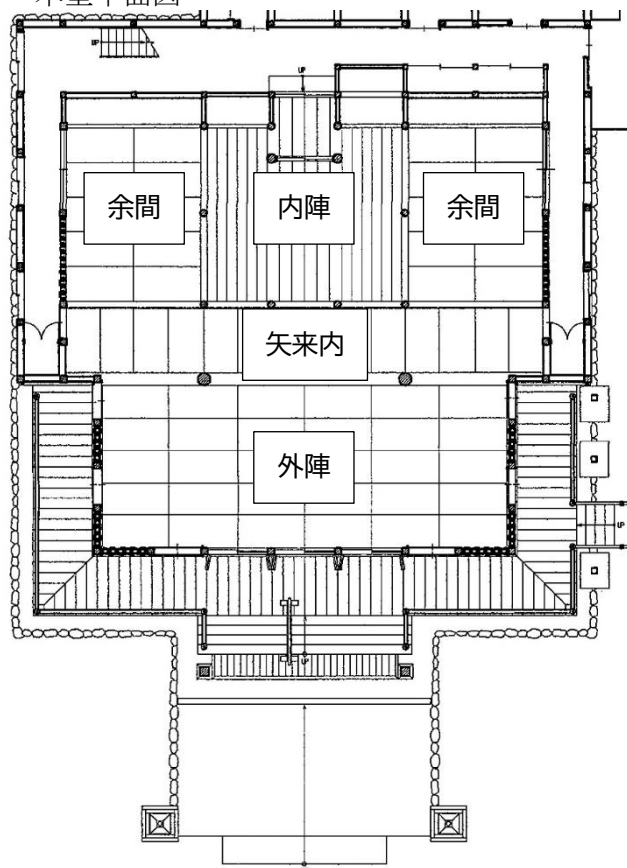
・小組格天井（こぐみごうてんじょう）

格天井（角材を格子に組み、その上に板を張った天井）のなかに、さらに細い組子で細かい格子を組んだもの。

・欄間（らんま）

天井と、かもい 鴨居（和室の襖や障子などの建具をはめる上部の溝が彫られた横木）またはながし 長押（鴨居の上など、和室の壁面をぐるりと囲む化粧部材）との間に、通風・採光のため格子や透かし彫りが取り付けられている所。

本堂平面図



本堂正面外観（南より）



本堂内部全景（外陣南より）



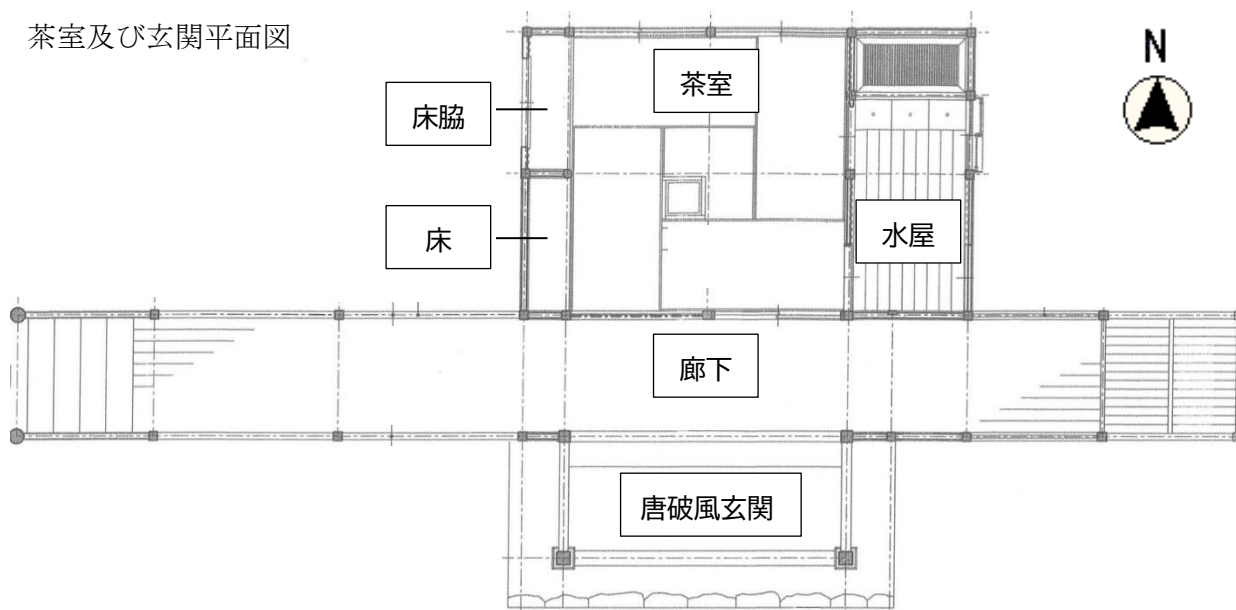
2 真龍寺茶室及び玄関 特徴

百々ヶ峰南麓の浄土真宗寺院の本堂と庫裏を繋ぐ渡り廊下と、その南側の唐破風玄関、北側の切妻造茶室からなる建物。茶室は四畳半で西面に床構え、床脇に円窓、東に水屋を配す。

茶室と廊下境壁の腰を無双窓として来客を知る。寺院の機能的な玄関と接客空間。

※建築年代は伝承と経年感による。昭和中期に北面躰り口を掃出窓にする等の改修。

茶室及び玄関平面図



用語解説

・唐破風（からはふ）

反転曲線をもった山形の破風。

・切妻造（きりつまづくり）

屋根の形式の一つで、棟を境に本を半開きに伏せたような屋根をもつもの。

・床脇（とこわき）

床の間の隣の部分。

・円窓（えんそう）

円形の通風・採光用の窓。

・水屋（みずや）

茶室に付属し、茶事の用意をととのえる場所。

・無双窓（むそうまど）

窓の形式の一つで、^{たていた}縦板をその幅だけ間をあけて打ちつけた^{れんじ}連子（木・竹などの細い材を、縦または横に一定の間隔を置いて、窓や欄間に取り付けたもの）二つを前後に並べ、外側を固定し、内側の連子を左右に移動可能としたもの。

・躰り口（にじりぐち）

茶室における客の出入り口。

・掃出窓（はきだしまど）

室内のごみを掃き出すために、外に向かって畳や床に接してつくった窓。

玄関（南より）



茶室（南東より）



3 真龍寺鐘楼 特徴

百々ヶ峰を背に山門と並ぶ浄土真宗寺院の鐘楼。入母屋造^{いりもやづくり}棧瓦^{さんかわらぶき}葺^ふ、二軒^{ふたのき}、三斗組^{みつとぐみ}、格天井^{ごうてんじょう}を張^はる。乱石積^{らんせきづみ}基壇^{きだん}に、内転び^{うちころび}の礎盤^{そばん}付^つ円柱^{えんちゆう}を貫^{ぬき}・虹梁^{こうりょう}・頭貫^{かしらぬき}で固めた方一間吹放^{ほういつけんふきはな}ちとする。本堂棟梁^{ほんだうとうりやう}の弟子の作で、地元大工の仕事ぶりを伝え、歴史的な伽藍^{がらん}景観を形成。

※建築年代は棟札^{むなふだ}による。棟梁は笠原治七。

用語解説

・二軒（ふたのき）

垂木^{たるき}（桁の上に渡し屋根を構成する材）が地垂木^{ひえん}と飛檐垂木（地垂木の先端にのり、軒先までのびている垂木）とで構成される軒

・三斗組（みつとぐみ）

柱上の組物の一種で、大斗^{だいと}上に肘木^{ひじき}をおき、上に三つの斗を載せたもの。

・格天井（ごうてんじょう）

角材を格子に組み、その上に板を張った天井のこと。

・内転び（うちころび）

柱を内側に傾けて建てる技法。垂直の柱より安定感がある。

・頭貫（かしらぬき）

柱の一番上に用いられる貫のこと。

鐘楼外観（南東より）



鐘楼外観（西より）



4 真龍寺山門 特徴

浄土真宗寺院の境内南正面に開く山門。切妻造^{きりつまづくり}棧瓦葺^{さんかわらぶき}、二軒^{ふたの}繁垂木^{きしげたるき}の薬医門^{やくいもん}で、袖塀^{そでべい}に潜^{くぐ}りを設ける。正面^{かえるまた} 臺股^{たいこ}は精緻な龍を彫り、内部に小組格天井^{こぐみごうてんじょう}を張る。鐘楼棟梁の弟子の作で、地元大工の仕事ぶりを伝え、百々ヶ峰を背にして地域の歴史的景観を形成する。

※建築年代は梁墨書による。棟梁は村瀬省吾。

用語解説

・二軒繁垂木（ふたのきしげたるき）

垂木^{たるき}（桁の上に渡し屋根を構成する材）を二重にし、上も下も面取りの角材を使い、間隔を狭くしたもの。

・薬医門（やくいもん）

前方（外側）に2本＝本柱^{ほんぼしら}、後ろ（内側）に2本＝控柱^{ひかえぼしら}の4本の柱で屋根を支えるが、屋根の中心の棟が本柱と控柱の中間（等距離）に位置せず、やや本柱寄りくる門。したがって、本柱のほうが控柱よりやや太く、荷重を多く支える構造になる。

・臺股（かえるまた）

梁や頭貫^{かしらぬき}の上にあって、上の荷重を支える材であるとともに装飾ともなる。カエルが脚を広げた姿に似ていることからこの名がある。



山門（南より）



山門 天井
（南下より）